

洪秀全の「天下一家」の思想 ——原道系列の文章に見られる概念の分析を中心に——

(東京大学大学院) 林 泰弘

I. はじめに

洪秀全(1814-1864)は、清の末葉、中国南部で反乱を起こし、「太平天国」(1850-1864)を創建した人物である。彼の残した文章のなかには、「天下は一家族である」といった観念が頻出する。清朝に対して軍事的な反乱を起こした時期にさえ、洪秀全は「天下一家」のスローガンを強く訴えている。

太平天国にかんする数多くの論著が中国を始め世界中で発表されてきたが、太平天国運動のまっただなかに立ち、その運動に精神的な意味合いを与え、またその方向を常に操舵していた洪秀全の思想にかんしてはまだ十分な検討が行われていない。なかでも洪秀全の「天下一家」の思想については、「天下の人々は、みな平等である」といった側面だけが取り上げられ、通説のようになっている⁽¹⁾。本稿は、彼の「天下一家」という概念が、何を意味するものであったのかを、彼の文章の分析を通じて究明しようとするものである。

「天下一家」とは、もともととは一つ概念であるが、本稿ではこれを「天下」と「一家」の概念に分けて分析を行うつもりである。そうすることによって、より緻密な分析が可能になるのではないかと考える。

分析の対象になる主なテキストは、洪秀全の「原道救世歌」、「原道醒世訓」そして「原道覺世訓」である⁽²⁾。「原道救世歌」、「原道醒世訓」は、1845年、洪秀全が布教地の広西から故郷の花県に帰り、子供たちを教えていた時期のものであり、「原道

覺世訓」は、1848年、彼が広州のアメリカ人牧師であるI.J.Roberts(中国名は、羅孝全)の下で、約2ヶ月間のキリスト教の勉強を終えた後の文章である⁽³⁾。

下の表は、「天下一家」と「閻羅妖」の概念が、それぞれ文章の中で何回くらい使われていたかを調べたものである。

表のように、「天下一家」という概念は、「原道系列」の各詩にはほぼ同じ頻度で現れる。そして「天下一家」の他者として、「閻羅妖」といった概念も1848年の「原道覺世訓」から多く登場していることがわかる。

「閻羅妖」とは、唯一神である上帝に逆らうものであり、人々を邪惡にさせるものである。したがって、それを殺さなければならない、と洪秀全は人々に呼びかけていた。1848年は、反乱、すなわち所謂「金田起義」の2年前である。ここでは、こうした「閻羅妖」の概念にも注目し、洪秀全の「天下一家」の概念を分析することにする。分析方法は、「天下」と「一家」を分離して論を進め、最終的にそれらを統合してみる。

なお、本稿で使われる「中国」とは、洪秀全当時の清朝が直接に支配していた地域を指すものとする。清朝は「世界帝国」であり、その支配範囲は

表1)「原道系列」の「天下一家」関連概念の出現頻度数

区 分	「天下一家」 という観念 *)	「閻羅妖」 という言葉	執筆年度	頒行年度
原道救世歌	3 (1)	0	1845-1846	1852
原道醒世訓	4 (1)	0	1845-1846	1852
原道覺世訓	4 (1)	9	1848	1852

*) () 内記は、「天下一家」という言葉が、そのまま使われた頻度である。

理想的には全世界であったが、現実的には、ほぼ今の中華人民共和国の統治範囲にあたるものであった。こうした範囲を本稿では「中国」と呼ぶことにする。そして本稿でいう「世界」、または「全世界」とは、「中国」をも含めた地球全体の範囲を意味する。

Ⅱ. 「天下」の二つの意味

「天下」というのは、もともと「天の下」を意味するもので地球全体をさす。ところが、古代中国においては、「天子」の支配領域として、中国世界の全体を意味していた。それはもちろん「四夷」といった地域まで含めていたが、「四夷」とは文明のいまだ届かない地域で、その規模も微々たるものとして考えられてきた⁽⁴⁾。ところが、こうした認識が大きく揺さぶられ次第に近代的な国家認識を持ち始めたのは、アヘン戦争前後のことである⁽⁵⁾。

近代以前の中国における「天下」という言葉の指す範囲については、学者の間に二つの対立的な理解が存在する。一つは「天下」＝「中国」の概念であり、いま一つは「天下」＝「無際限の世界」、すなわち全世界の概念である⁽⁶⁾。

洪秀全は、後に検討するが、「番国」と「中国」とを対等に考える傾向があった。広州の近くに住んでいた彼は、1847年頃、香港に出かけて、アメリカ人牧師I.J.Robertsのところを訪ね、そこで聖書やキリスト教に関して勉強したことがある。それゆえに、同時代の中国人に比べると遥かに開明的な認識をもっていたはずの彼にとって、「天下」とは、いったい何物であったのか。結論から言えば「天下」とは、「全世界」の意味も「中国」だけの意味も、両方の意味が伺える。

「天下」は「全世界」である

まず、「天下」が地球全体をイメージさせる洪秀全の文章をみてみると、次のようである⁽⁷⁾。

① 蓋實夫天下凡間、分言之則有萬国、統言

之則實一家。皇上帝、天下凡間大共之父也。
(「原道醒世訓」)

思うに天下の俗世間は、分けて言えば、即ち万国があり、まとめて言えば、実は一家である。皇上帝は、天下俗世間の共通の父である。

② 上帝原來是父親、水源木本急尋眞。量寬異国皆同国、心好天人亦世人。(「原道醒世訓」)

上帝は本来父親である。水の源や木の根は、速やかに眞実を求める。度量が寛ければ、異国も皆が同じ国であり、心が好ければ、天人も世人も同じである。

上帝は「天下」の共通の父親であり、「天下の俗世間」を分けて言えば万国であるが、実は皆一家族である (①)。ゆえに、すべての国々は同じ国である (②)、と語っている。

ここで洪秀全の言う万国、または異国とは、なにを指すものであったらうか。

この時期、洪秀全の使っていた「中国」という言葉の概念を考えると、それは中国世界を越えた国々、すなわち「番国」を指すものであったということがわかる。例えば「原道醒世訓」のなかで、

皇上帝、天下凡間大共之父也。近而中国、是皇上帝主宰理化。遠而番国亦然。遠而番国、是皇上帝生養保佑。近而中国亦然。

皇上帝は、天下俗世間の共通の父である。近くの中国は、皇上帝が主宰して教化する。遠くは「番国」もそうである。遠くの「番国」は、皇上帝が生育して加護する。近くは中国もそうである。

とあるが、ここでの「中国」は常に、「番国」と対になって使われている。そしてこの二つの「国」より上の段階に「天下」というものが存在している。したがって、「天下」とは、地球全体、すなわち「全世界」を指すものであったと言える。

「天下」は「中国」である

一方、洪秀全の文章の中には、「天下」が中国

世界だけを強くイメージさせる用例も見られる。たとえば、「原道救世歌」に、

③ 天父上帝人人共，天下一家自古傳。盤古以下至三代，君民一體敬皇天。

天の父なる上帝は人々の共通のものであり、「天下一家」は古より伝わっている⁽⁸⁾。盤古以来、三代に至るまで、君民は一体になって皇天を敬った。

とあり、「原道覺世訓」に、

④此聖人所以天下一家，時劑民吾同胞之懷，而不忍一日忘天下。

これこそ聖人が、天下は一家であることを以って、常に民はわが同胞であると思ひ、しかも一日も天下を忘れるに忍びなかった所以である。

とある。これらの用例は、中国古代にも、「天下一家」の概念が存在していたことを証明するために、洪秀全が引用したものである。彼は、「番国」の聖書にみられる「天下一家」の概念、即ち③の「天父上帝人人共」の概念が、「中国」にもすでに存在していたと主張している⁽⁹⁾。

古より伝わっている「天下」、即ち昔の聖人の「天下」とは、理念上では地球全体を意味するが、彼等の考えていた地球全体とは、実は中央の国を中心とした「中国」世界であり、「番国」と「中国」とを対等的かつ全体的に包括する「世界」とは言えない。

換言すれば、洪秀全が「近而中国是皇上帝主宰理。遠而番国亦然。」といった時の「天下」は、どちらも中心的優位を占めていない、「番国」と「中国」が対等に存在する「世界」を示している。これに反して、「天父上帝人人共，天下一家自古傳」といった時の「天下」は、中央の国を中心とした世界、つまり「大きい中国+小さい四夷」というイメージの世界である⁽¹⁰⁾。

「番国」と「中国」とをほぼ対等に区分していた洪秀全の近代的な「天下」概念に、「中国」を

中央に据えた伝統的な「天下」概念が加わっている。即ち、近代的な「天下」の概念と古代の伝統的な「天下」概念が融合され、もう一つの複雑な「天下」概念が生まれていたのである。

「天下」が「中国」を思わせるもう一つの例は、洪秀全が定義する「上帝」と「閻羅妖」の様子である。

例文③の「天父上帝人人共，天下一家自古傳。盤古以下至三代，君民一體敬皇天」のなかで、「上帝」とは、盤古以来三代まで、君民は一体になり敬っていた「皇天」として定義される。西洋の「上帝」と中国の「上帝」が、一つのイメージを為していたわけである⁽¹¹⁾。キリスト教の神である「天父上帝」と中国伝統の「皇天」が、同じ神であるということは、「天下一家」という言葉が、「中国は一家である」という意味を強く思わせる結果になる。少なくとも、中国世界に住んでいた人々には、そのような印象を与えてしまうのではないかと考える。

そして洪秀全は、聖書の悪魔の存在も、中国の伝統的な「閻羅妖」として見なしている。

「閻羅妖」とは妖魔のかしらで、時には清朝の皇帝を暗示する言葉としても用いられた概念である。ところが、洪秀全は「原道覺世訓」のなかで、「秦漢時代から今まで一、二千年の間に、なんと多くの人々の靈魂がこの閻羅妖に捕らえられこなわれたことか。」⁽¹²⁾といい、キリスト教の悪魔を、遠く中国の古代からの「閻羅妖」と見なす。また、同じ文章に、

而近代則閻羅妖注生死邪説，閻羅妖乃是老蛇，妖鬼也，最作怪多變，迷惑纏捉凡間人靈魂。
（「原道覺世訓」）

しかるに近ごろ閻羅妖が生死を定めるのだとする邪説がおこった。閻羅妖とはつまり老蛇、妖鬼である。かれらはしばしばいろいろなものに化けて、奇怪なことをやり、この世の人々の靈魂にまとりついて、これを迷わし

ている。

とあり、「閻羅妖」を、人々の生死を定める存在として、そしてさまざまに変化する存在として述べている。自分の姿を常に変化させる閻羅妖の様子は、ハンバーグの記録にも見られる。即ち、洪秀全が1837年に神秘体験をした時に彼の前に現われた妖魔は、たえず姿を変化させる存在であって、鳥のように飛んだり、ライオンのような姿をしたりもしたという¹³⁾。このように、妖魔が自分の姿を色々と変化させるという観念は「鬼仔面、時時変（鬼の顔は、時々変わる）」¹⁴⁾という客家人のことわざにも見られるもので、中国の鬼の様子がキリスト教の悪魔に投影されているのである。

また、「原道覺世訓」には、

又如近代，有怪人誑言，東海龍妖發雨，東海龍妖，即是閻羅妖變身。

また近ごろ、変なやつで「東海の竜妖が雨を降らす」と、でたらめなことをいう者がいるが、東海の竜妖とは、つまり閻羅妖の変身なのだ。という文章も見られるが、ここでは昔から民間の間でひろく崇拜されていた竜神、又は竜王¹⁵⁾も閻羅妖の変身として見なされている。閻羅妖に、中国の悪魔としての役割が加えられていたわけである。

結局のところ、「上帝」も「閻羅妖」も、「世界」の神でありながら「中国」だけの神になり、神の性格は両面性、即ち西洋的でありながら、中国的である性格を帯びるようになる。したがって、「天下」に侵入してきた閻羅妖は、地球全体、すなわち「世界」に侵入してきたイメージだけでなく、「中国」に侵入してきた閻羅妖としてのイメージも持つことになり、「閻羅妖＝満州族の頭」、「妖魔＝満州族」といった図式が成立する。

総じていえば、キリスト教の唯一神である「上帝」とそれに背く存在である「閻羅妖」が、中国の伝統的な神々のイメージを帯びることによって、「天下」＝「中国」といったイメージが浮きぼりになる。

Ⅲ. 「一家」の二つの意味

「天下は一家である」という概念のなかで、「一家」という言葉の意味は何であろうか。ここでは、「天下は一家族である」という意味と「天下は我が家、即ち洪秀全の家である」という意味の、二つのあい異なる思想観念を洪秀全の思想観念から探ってみる。

「天下」は一家族である

まず、「一家」が「一家族である」という意味をあらわす場合を考察する。

① 普天之下，皆兄弟，靈魂同是，自天來。上帝視之，皆赤子，人自相殘，甚惻哀。（「原道救世歌」）

普ねき天の下は，皆が兄弟であり，靈魂は同じく，天より来た。上帝が見るには，皆は赤子であり，人々が互いにむごいことをするので，甚だしく哀しい。

② 天下多男人，盡是兄弟之輩，天下多女子，盡是姊妹之群。何得存此疆彼界之私。何可起爾吞我并之念。（「原道醒世訓」）

天下の多くの男は，すべてが兄弟の輩であり，天下の多くの女は，すべてが姉妹である。どうして彼此の境界といった私心が存在できるのか。どうして互いに併呑したりする観念が起りうるだろうか。

③ 行見，天下一家，共享太平。幾何乖離澆薄之世，其不一旦變而，爲公平正直之世也。（「原道醒世訓」）

やがて，天下は一家になり，共に太平を享受するようになる。幾ら，人心が乖離し人情が薄いこの世であっても，一朝も経たずに変わり，公平正直な世になるだろう。

④ 天下總一家，凡間皆兄弟。何也？自人肉身論，各有父母姓氏，似有此疆彼界之分，而萬姓同出一姓，一姓同出一祖，其源亦未始不

同。(「原道覺世訓」)

天下は総じて一家であり、この世はみな兄弟である。 どうしてであろうか。人の身体から論じれば、各自は父母や姓氏を持っており、まるで互いに境界の区分があるようであるが、万姓は同じく一姓から出て、一姓は同じく一つの祖先から出たもので、その源も始めから異なっていたわけではない。

⑤ 予想夫天下凡間、人民雖衆、總爲皇上帝、所化所生。 生于皇上帝長亦皇上帝。一衣一食并頼皇上帝。(「原道覺世訓」)

私は考えるに、そもそも天下俗世間の人々は多いが、みな皇上帝が作り、生み出したものである。 皇上帝より生まれ、皇上帝より育てられたのだ。着物一つも食べ物一つも、みな皇上帝に頼っている。

天下は、総じて一家であり (③・④)、人々はみな兄弟である (①・②・④)。そしてその兄弟の父なる存在が「上帝」である (①・④・⑤)。

③の「天下一家」や④の「天下總一家」で、「天下」は主語として、また「一家」は補語として使われ、「主語+補語」の形になっている。

こうした「天下一家」の概念は、「天下」の人々をすべて一家族、または兄弟として見なしているのです。そうした面からみれば、「平等」の思想としても解釈できる⁹⁹。たとえば、前の例文③をみると、洪秀全は「公平正直な世になるだろう」と語り、「公平」な世界を願っていたのは間違い無い。ところが、そうした概念が「平等」の観念そのものであるか、あるいは、「天下一家」の思想が平等の思想そのものであるかについては、多少議論の余地が残る。

上の例文だけに限って言えば、洪秀全の「天下一家」の観念は、平等の思想に発展する可能性を持った観念であって平等そのものを訴えるものとは言えない。なぜならば、洪秀全が「天下一家」をいうとき、その意味の重点は、人々の間の平等

な人間関係よりは、人々や国々の区別、または相互の紛争を無くそう、といったところにあった。例えば例文①、②、④にそのような考えが現れる。

「天下」は一家族であるという意味は、前章で考察したように、「天下」を「中国」という言葉に置き換えれば、「中国」は一家族であるとの意味になる。

例えば、洪仁玕の『英傑歸眞』¹⁰⁰をみれば、洪秀全は

以五萬萬兆之化人、受制於數百萬之韃妖、誠足爲恥爲辱之甚者。(中略)中国之民、富者安得不貧、貧者安能守法。

五億兆の華人が数百万の韃妖に統制されるのは、誠に恥ずかしいことである。(中略)中国の民は、富者なら、如何にして貧しくならないことができるだろうか。また、貧しいものなら、如何にして法律を守ることができるだろうか。

と述べている。ここで、洪秀全は「五億兆の華人」、または「中国の民」を、一つの纏まりとして見なしている。すなわち「韃妖に統制される」がゆえに、「誠に恥ずかしい」一つの集団として認識していたことをあらわす。

また、「原道覺世訓」のなかの次のような文章には、世界のすべての人々が一つの家族のように考えられている。

敬拜皇上帝則爲皇上帝子女、生前皇上帝看顧、死後魂昇天堂、永遠在天上享福、何等快活威风。 溺信各邪神則變成妖徒鬼卒、生前惹鬼纏、死後被鬼捉、永遠在地獄受苦、何等羞辱愁煩。皇上帝を敬拝すれば、皇上帝の子女であり、生前には皇上帝が加護し、死後には魂が天堂に昇り、永遠に天上で幸福を享受する。なんという快活かつ威风であろう。 各邪神を盲信すれば、妖鬼の手下に変えられてしまい、生前には鬼にからめとられ、死後は鬼にとらえ

られて、永遠に地獄で苦を受ける。なんと恥ずかしくて、おぞましいことか！

上帝を敬拝すれば上帝の子女であり、邪神を信じれば妖鬼の手下に変えられてしまうという。基本的には天下のすべての人々が一家であり、そのなかで、妖魔、すなわち邪神を信じる人々だけが他者として排除される。

「天下」は「我が家」、即ち洪秀全の家である

では、「天下一家」のもう一つの意味、すなわち「天下」が洪秀全自分自身の家である、という意味として解釈できる場合を考察してみよう。

もともと「天下一家」の概念は、『礼記』礼運篇に次のようにみられる。

故聖人耐以天下為一家、以中国為一人者、非意之也。必知其情，辟於其義，明於其利，達於其患，然後能為之。

ゆえに聖人は、よく天下をもって一家となし、中国をもって一人となすことができるが、これは意図したわけではない。必ずその事情をしり、その道義を開き、その利益を明らかにし、その憂患に達して、そののちそれを為すことができたのである⁹⁹。

ここで「以天下為一家」とは、「天下でもって一家となす」意味で、聖人が天下を一つの家のように考える、と解釈される。このように、天下を一つの家と見なすことは、場合によっては「自分の家」即ち「自分の私有物」のようなものとして見なす可能性もある。

洪秀全の書いた「原道覺世訓」にも次のような文章が見られる。

此聖人所以天下一家，時劑民吾同胞之懷，而不忍一日忘天下。

これこそ聖人が、天下は一家であることを以って、常に民はわが同胞であると思い、しかも一日も天下を忘れるに忍びなかった所以である。

ここで、「天下一家」は「所以天下一家」の形で記され、「礼運篇」の「以天下為一家」とはその文章構成が明らかに異なるが、その意味についていえば同じである。すなわち洪秀全は、聖人が常に「民はわが同胞である」と思っていたと述べている。

結局、ここで「天下は一家である」とは、聖人が天下を「一家」と認識し、天下の民を「我が同胞」として見なすという意味である。こうした観点からみれば、「一家」とは、聖人の自分自身の家として見なされる可能性も存在する。

ハンバーグの記録によれば、洪秀全は「原道救世歌」と「原道醒世訓」を書いた直後、すなわち1846年頃に、次のようなことを洪仁玕に語ったという。

もし神が私を助けて、われわれの土地を恢復させてくださるならば、私はすべての人々に向かい、互いに傷つけあったり、奪い合ったりすることなく、各自はそれぞれ自分の財産を所有せよ、と教えるつもりである¹⁰⁰。

ここで、洪秀全は神（“God”）が、自分（“me”）を助けて自分たち土地（“our estate”）を、恢復して下されば、すべての人々（“all nations”）に、互いに平和な生活を暮らすように教えるつもりだ（“I ought to teach”）という。ようするに、洪秀全は自分を“all nations”に何かを教える者として想定している。そして、教えたい対象は“all nations”つまり「すべての纏まった国民のような人々」¹⁰¹であり、また洪秀全は自分自身を「特殊な地位にある存在」として認識していたことが伺われる。

「特殊な地位にある存在」としての認識は、「原道救世歌」、「原道覺世訓」、「原道醒世訓」の題目にも見られる。つまり、そうした存在は「世界を救う」存在であり、「世界を覚醒させる」存在でもある。もちろん、そのような存在は、「天下をもって己が任と為す」¹⁰²単なる純粋な知識人にすぎない可能性もあるが、場合によっては「天

下」を自分の家のようなものとして考える存在にもなり得る。つまり、天下の統治者、すなわち天下を所有した昔の帝王のような存在である。洪秀全のこうした観念は、原道系列の文章だけをみれば、まだ明確に現われていないが、ハンバーグの記録と合わせてみれば確かに存在するようである。

洪秀全が上帝の第二子であり、長子キリストの弟で、地上に降下した「真の主」であるという神話は、遅くとも1847年頃、すなわち本章の対象としている時期に確立されている⁴⁴。ところが、この神話のように「世界を我が家のようなものとして考える。」または「中国を我が家と見なす。」という観念は、表面にあまり強くあらわれておらず、むしろ「世界の人々は全て一大家族である。」といったスローガンが前面に打ち出されていた。

IV. 終わりに

本稿では、洪秀全の詩文にあらわれた「天下一家」の概念を分析し、その思想内容が実際にどのようなものであったのかを検討した。具体的には、原道系列の「天下一家」の概念を、「天下」と「一家」が、それぞれどのように解釈できるものであるかを考えてみた。本稿で、「天下一家」という纏まった概念を二つに分けて別の概念、すなわち「天下」という概念と「一家」という概念に区別して分析を行った理由は、洪秀全の文章に表れた「天下一家」の概念が曖昧で、かつ多義的なものであったからである。

洪秀全の文章の中に使われている「天下」という言葉には、二つの相異なる意味が含まれている。一つは、全世界を指す意味であり、もう一つは、それよりは小さい領域の「中国」を指す意味である。また、「一家」という言葉も、二つの意味が考えられるが、一つは「一大家族である」との意味であり、もう一つは「我が家」すなわち洪秀全自分自身の家という意味である。こうした内容を纏めれば、「天下一家」の洪秀全の思想は、

i) 「世界」は一大家族である。

ii) 「中国」は一大家族である。

iii) 「世界」は洪秀全の家である。

iv) 「中国」は洪秀全の家である。

といった思想内容を持つものであったと結論づけることができる。

では、i) 「世界は一大家族である。」という概念とii) 「中国は一大家族である。」という概念は、如何にして一つの「天下一家」のスローガンの下に並存できるのだろうか。こうした問題は、まだそのスローガンの影響を受けていた人々の言説や行動を具体的な史料を通じて証明しなければならない問題であるが、ここでは、大まかにその並存の可能性だけを、抽象的ではあるが指摘しておきたい。

例えば、「天下の全ての人々はみな一大家族である」と洪秀全が当時の広州または香港に住んでいた人々に主張していたとしたら、それを聞いた人々は、西洋人の宣教師や商人、または大きな船に乗っていた異国の兵士たちも含め、人々はすべて兄弟であると考えerはずである。ところが、もし洪秀全が、西洋人に接することがなかった、広西の山奥に住む人々にたいし、「天下の全ての人々はみな一大家族である」といったら、彼等は、自分たちとは衣装や言語などが違う周りの人々が、みな自分たちの兄弟であると考えerのではないだろうか。i) とii) の概念が、並存するとは、こういった趣旨の話である。

太平天国以前の洪秀全の「天下一家」の言葉は、多くの場合、「天下は一大家族である」との意味に使われていた。ところが、太平天国時期に入ると、彼は「中国」を、神から貰った自分の所有物として考える傾向が強くなる。もちろん、こうした洪秀全の傾向は、多くの研究者によってすでに指摘されているが、本稿では、こうした太平天国時期の洪秀全の思想的傾向も、実は彼の「天下一家」の思想の一つとして考えられる、ということを目指

摘した。例えば、「世界は洪秀全の家である」といった観念は、イギリスに対して太平天国にまみえることを要求した『賜西洋番弟詔』のなかの「全世界の土地は太平天国のものである」といった表現にも見られる。

本稿では洪秀全の「天下一家」の思想を、彼の太平天国以前の文章に限って考察を行ったが、太平天国時期の「天下一家」の概念も検討すべきであると思われる。また洪秀全のこうした思想を彼の文章だけでなく、太平天国運動そのものからも読み出す必要があると考える。これらの作業は今後の課題としたい。

[注]

- (1) 例えば、郭秀文「略論洪秀全，孫中山与基督教關係之異同」中国人民大学編『宗教』1999年第6期，2000年，91頁；ポール・A・コーエン著，佐藤慎一訳『知の帝国主義——オリエンタリズムと中国像——』49頁；または，Philip A. Kuhn「太平天国之乱」(張玉法主譯『劍橋中国史』John K. Fairbank編，第十冊晚清篇(上)1800—1900，台北南天書局，1987年；原著はDenis Twitchett and John K. Fairbank, The Cambridge History of China, Vol 10 Late Ch'ing, 1800-1911, Part1, Cambridge University Press, 1978) 333頁などを参照。
- (2) 以下，「原道救世歌」，「原道醒世訓」そして「原道覺世訓」を，本稿では「原道系列」と略称する。
- (3) 『太平天日』によると「主回東後，年三十三，歲在乙巳矣，作原道救世詔，原道救世訓。」とあり，乙巳年，即ち1845年に「原道救世詔」と「原道救世訓」を書いたという(洪仁玕「太平天日」鄧之誠等編『太平天国資料』近代中国資料叢刊続編，第36輯352卷，文海出版社)。ところで，ハンバーグの『洪秀全の幻想』には，1845年から1846年に至る期間中に書いたものという(ハンバーグ『洪秀全の幻想』29)。一方，洪仁玕の「洪秀全の来歴」には「甲辰の歳」(1844年)に「百正歌」など，「五十餘帙」作ったとあり(洪仁玕「洪秀全の来歴」『逸経』第25期，1937年，37—38頁)，執筆年度がそれぞれ異なる。ここではハンバーグの記録に従う。
- (4) John K. Fairbank「第一章 導論:舊秩序」張玉法主譯『劍橋中国史』37—38頁参照。
- (5) 李國祁「中国近代民族思想」(李國祁等著『近代中国思想人物論 民族主義』台北・時報文化出版，1970年)25頁；李恩涵「論清季中国的民族主義」『中国近代現代史論集』19，第18編近代思潮，420—421頁，など参照。
- (6) 渡辺信一郎「「天下」のイデオロギー構造——唐代中国を中心に——」日本史研究会編『日本史研究』440，1999年4月，36—37頁。
- (7) 本稿における洪秀全の「原道救世歌」「原道醒世訓」「原道覺世訓」からの引用は，すべて羅爾綱篇註『太平天国文選』(上海人民出版社，1956年)に拠る。日本語訳は『原典中国近代思想史』(西順藏編，岩波書店，1976年)所収の小島晋治氏の訳を参照し，拙訳を掲げる。
- (8) 「天父上帝人人共，天下一家自古傳」を，小島晋治氏は「天の父なる上帝は，世の人すべての父なるぞ。天下は一つの家にして，古えよりぞかく伝う」と訳するが，ここでは前後の句，即ち「天父上帝」と「天下一家」を，そして「人人共」と「自古傳」をそれぞれ対偶と見なして訳した。
- (9) ここでの「「番国」の聖書にみられる「天下一家」の概念」とは，洪秀全が「原道覺世訓」の冒頭に記している「天下は一家であり，世界の人々は皆兄弟である」といった概念である。
- (10) 古代の中国人は，自国を「中華」または「中国」と称し，外のものはみな蠻夷と呼び，禽獸とあい変わらないものと考えていた(内藤湖南『清朝史通論』東洋文庫571，平凡社，1993年，

- 354頁)。
- (11) 王慶成氏は、こうした神のイメージについて、当時、洪秀全の認識のなかでは「上帝の人格觀念が明確でなかった」と指摘する。そして彼は、上帝という人格神を、中国の「天」と混同し、ある時はその神が「主宰」の神であったり、ある時は「自然」の神であったりして、洪秀全の宗教思想が汎神論的であるという誤解を招いたと説明する(王慶成「論洪秀全の早期思想及其發展」『太平天国的歴史和思想』中華書局、1985年、38頁)。
- (12) 「自秦漢至今一二千年、幾多凡人靈魂、被這閻羅妖纏捉磨害。」(洪秀全「原道覺世訓」)
- (13) “As in his imagination he pursued the Demons, they seemed to undergo various changes and transformations—one time flying as birds, and another time appearing as lions. In case he was not able to overcome them, he held out his seal against them, at the sight of which they immediately fled away. He imagined himself pursuing them to the most remote places under heaven, and every where he made war with and destroyed them.” (Theodore Hamberg, pp. 11-12).
- (14) 中原週刊社編印『新編客家話——客家諺語』台北、中原週刊社、1993年、21頁。
- (15) 「竜王」は、民間伝説と仏教・道教の伝説のなかで、雨を司る神である(孟慶遠主編、小島晋治訳『中国歴史文化事典』新潮社、1998年、1051頁「竜王」条参照)。
- (16) 例えば、ポール・A・コーエンは、太平天国の反乱者たちが「全人類は兄弟であり平等であると考えた」という(佐藤慎一訳『知の帝国主義——オリエンタリズムと中国像——』49頁)。なお、Philip A. Kuhnは、「四海の内はみな兄弟である」觀念には、粗雑ではあるが平等の傾向が見られるという(張玉法主譯『劍橋中国史』333頁)。
- (17) 洪仁玕『英傑歸眞』(高陽李氏藏手寫本、台北・大華印書館、1968年、16-17頁)。
- (18) 原文は、集英社刊『礼記 中』(金沢漢文大系第13巻、1977年)を参照。日本語訳は、同書の読み下し文、注などによる拙訳である。
- (19) “If God will help me to recover our estate, I ought to teach all nations to hold every one its own possessions, without injuring or robbing one another” (Theodore Hamberg, p. 30).
- (20) 当時、中国にはまだこうした“nations”(国民)といった集団、すなわち共同体意識や公民精神を基礎にした国家の「国民」はもともと存在していなかった(村田雄二郎「中国近代革命と儒教社会の反転」溝口雄三他編『中国という視座』これからの世界史4、平凡社、1995年、279頁参照)。したがって、こうした概念を洪秀全が直接使ったはずはない、と思われる。多分、ハンバーグが洪仁玕より、引用文のような趣旨の話を聞いて、その雰囲気からこうした“nations”という言葉を使っていたと思われる。こうした言葉づかいは、ハンバーグが当時の「太平天国」を近代ヨーロッパの国のような新しい「国民国家」として考えていたことを物語っていると思う。
- (21) これは范仲淹を評価した朱子の言葉である(余英時著『中国近世の宗教倫理と商人精神』。森紀子訳、平凡社、1991年、127頁より再引用)中国の伝統的な知識人、とりわけ宋代以来の新儒家を自認している知識人たちが、天下のことを自分の任務として捉える傾向については、余英時氏の『中国近世の宗教倫理と商人精神』に、詳しく分析されている(余英時著『中国近世の宗教倫理と商人精神』127-136頁参照)。
- (22) 小島晋治・丸山松幸著『中国近現代史』岩波新書336、岩波書店、1986年、19-21頁。